

最新鋭スキー技法の具現者たち

栄冠を求めて

連載第4回——文・写真/志賀仁郎

オーストリアのサン・クリストフで誕生したウエーデルンという技法は、たちまち世界中のスキーヤーに注目され、エキスパートの勲章として、習得の目標となった。なかでも日本では、狭いゲレンデというスキー場の環境が背景にあり、ウエーデルン信仰が生まれた。だが、スキー用具の進歩とともに、技法としてのウエーデルンは変容を遂げる。上級者の特権から中級者までの到達目標へと、裾野を広げてゆくのである。

ウエーデルンの変貌

1968年アスペンインタースキーで披露された各国の技術体系の最終種目はウエーデルンとなっていた。そのウエーデルンは、かつてのオーストリ

ア教程の求めたものとはかなり違った技法となっていた。55年教程の中で、フランツ・フルトナーが見せた技法は、上体を正面に向けて静止させ、しなやかに下肢を左右に振り出し、スキーのテールを強く押し出すというものであり、そのすべりを正面から見ると、腰を中心にした上体はフォールラインに対して直進する。その時、スキーのトップは、わずかに左右

に振れ、テールは大きく左右に押し出される。フェルゼンシュエプ（踏み押し出し）と呼ばれたこの技法は、当時の硬い木のスキーには、極めて苦しい技法だったが、60年代に入ってスキー用具はますます進歩を遂げた。グラスファイバー、メタル、エポキシといった新しい素材が、次々によりまわりやすいスキーを生み出し、新しい「曲げやすいスキー」がウエーデルンをやさしい技法に変え、



1968年アスペンでのインタースキーでカナダが見せたスピードのあるパラレル・クリスチャンは、切れのいい前衛的なすべりであった

さらにウエーデルンそのものを変貌させた。グラスのスキー、クナイスルのホワイトスターの出現、さらにロシニョールのストラートの開発と続いた画期的なスキー板の登場によってウエーデルンの技術革新は加速されたのである。

アスペンは各国のトップスキーヤーたちのウエーデルンの競演となったが、そのすべりは、ウエーデルン（犬の尻尾を振る動き）と

呼ぶ印象とは異なったものとなった。

とくに当時の西ドイツの圧倒的な力感にあふれたウエーデルン、フランスの速さと切れのウエーデルンの演技は、デモコースの下部ゴール地点に集まったカメラマンや多くの関係者たちをたじろがせた。

ワットと声を上げて一斉に後ろに引き下がるというシーンが続出した。それまでのインタースキーのデモには感じ

られなかった迫力であった。

私は、第8回インタースキーを取材して、『世界のスキー』アスペンからの報告書という本をその年の秋に発表した。その中で、このウエーデルンについて次のように記した。

「世界のウエーデルンの技術はまったく同じになった、という感想を多くの人々の口から聞きますが私の目には、ウエーデルンにこそ世界各国の技術の特徴が強く見られたという

ように見えるのです。たしかに上体をフオー
ルラインに正体させ、脚部を躍動的に左右に
振り出すという部分はまったく同じですが、
ウエーデルンを脚部の動作に集約させたオー
ストリアと、ストックを突くことをひとつの
ポイントとしたフランス、そして、上体を左
右に振るような先行動作を見せた西ドイツ、
ブレーキの作用をあまり入れないで蛇行する
アメリカとそれぞれ個性的なデモを見せてい
ました。中でも、ウエーデルンの発祥地であ
るオーストリアのウエーデルンはみがき抜か
れた一級品としての風格、そして美しさとい
うものを感じさせる見事なものです。」

「西ドイツのデモは全体としてスピードと力
強さを強調していたように思えます。明らか
に、従来のオーストリア的なものとは色合い
の違う技術であり、オーストリア・メソッド
を越えた何かを感じられます。」
ウエーデルンは、新しい技法となっていた
のである。

フランスの提起した アバルマン技法

フランスのスキー技法の研究者グルノーブル
大学教授、ジョルジュ・ジュベールと共同
研究者ジャン・バルネは、その当時、アルペ
ンレーサーの技法を分析し体系づける研究を
進め、いくつかの論文を発表していた。
その中に紹介された技法は極めて革新的な
ものであった。

66年、南米チリのポルティヨで開かれた世
界選手権大会に圧勝したフランスのエースた
ちの技法が彼らの論文によって明らかにする
と、世界中の研究者たちは、その論文に関心
を深めていった。

アバルマン（呑み込み）技法といった提案
は、それまでのオーストリアの主張とはまっ
たく正反対といえる技法であった。

ジャン・クロード・キリー、パトリック・
リュッセルらのフランスのスーパーエースの
すべりの中から発想された、その技法は、オ

ーストリアのバインシュピール（振り子）技
法が下肢への左右への動きを重視したのに対
して、アバルマンは、下肢の上半への抱え込
み送り出しによる上下の動きを重視したもの
といえただろう。

オーストリアの技法が体の上下動を使い左
右にスキーを押し出すのに対して、フランス
のジュベールたちの主張した技法は上半の上下
動を極力抑えて左右へスキーを走らせるこ
うのものであった。

オーストリアの端麗なウエーデルンと比較
すると、フランス・ドイツの戦闘的なムード
のウエーデルンは新しい魅力を秘めていた。

オーストリアの ヴェレンテクニク

オーストリアは70年1月、サン・クリスト
フで開催されたインターコース（国際スキー
教師トレーニング週間）で、突然まったく新
しい発想のスキー技法を発表した。

波の斜面をすべるための技術としたヴェレ
ンテクニク（波のテクニク）である。

特設された波を想定した段々の斜面にサン
・クリストフ、ブンドスハイムの俊英たち
が演じて見せた技法は、鮮烈であった。

「曲げてまわし、伸ばしてまわす」と説明さ
れたそのすべりは、波の頂点を深くヒザを曲
げて吸収し、波の頂点を過ぎて、ヒザを伸ば
してスキーのテールをズラして、まわり込む
というもの、フランスのアバルマン技法をオ
ーストリア流に解釈したものといえた。

すべてのターンに立ち上がり沈み込みの上
下動を採用していたオーストリアが、沈み込
み技法を採用した。その事実は世界中のスキ
ー関係者に衝撃を与えた。

オーストリアのウエーデルンもこのヴェレ
ンテクニクによって大きく変わることにな
った。

当時サン・クリストフのブンドスハイムの
教師たちの中で技術的な面でのリーダーは、
若いミハエル・フルトナーであった。



68年アスペンで、当時
の西ドイツが見せたウ
エーデルンは、従来の
オーストリアメソッド
のものとは異なり、激
しいスピードのあるす
べりであった。このシ
ュロイダーテクニク
には、戦闘的な躍動感
があふれていた



細野 博 (91技術派)

約10年前、技術派は、名デモ藤本進の育て上げた俊英たちによって
上位が争われていた。その時代、日本のスキーは、美しい正確なスキ
ーを求め、技術派、デモ派の舞台は、様式美を競う場と化していた。
その頂点にあったのが、佐藤正人、吉田幸一、細野博だ。

84年の第21回、佐藤、吉田を抑えてトップに立った細野は、平沢
文雄、関健太郎、平川仁彦、丸山隆文らによって受け継がれてきた美
しい正確なスキーの最後の伝承者であった。

様式美のスキーは、86年以降の速さ、強さの時代に大きく順位を下
げるのだが、この彼にとっては最後の演技となったウエーデルンには、
はっきりと日本人の求めた技法の残像が刻み込まれている



オズワルド・トエ
ッチ (92技術派)

イタリアの技法はつ
ねにスキーを前へ走ら
せるといふ姿勢に貫か
れている。ワールドカ
ップのトップレーサー
は、スキー教師となっ
た今も、切れのいい走
りのスキーを見せてい
る。アスペン以降に定
着した、ズレのない切
れのスキーだ



渡部三郎 (93技術派)

様式美のスキーから速さ強さのスポーツのスキーへと、技術派が流れを変えた。
その変化の時代を継いだのが、サブちゃんであった。佐藤、細野らの小資板グル
ープにあって様式美に染まらず、速さを武器にした俊英は初出場から17年を
経て今なお、速さ強さを持ち続けている。そのスキーは、極めて高い完成度を見せ、
時にはエレガントですらある。

速さ強さを研ぎすまして、その技法は快感度を高め、さらに美しさを見せるよ
うになった。しなやかに雪面をはりつく技法は切れと走りを感じさせる。新しい
時代のウエーデルンといってい、第30回のA、B両種目のすべりはマイク・フ
ァーニーに次ぐ出来であったと私には見えた

ウエーデルンを最初に完成させた、あのフ
ランツ・フルトナーの息子である。

ミッキーのすべりは、パワーに溢れ奔馬の
ような精悍さがあつた。力のスキー、強さ速
さのスキーであつた。

ミッキーのウエーデルンは父親フランツが
作り上げた、優美で華麗なオーストリアの伝
統を突き崩した。

サン・クリストフのヴェレンテクニク
の発表の衝撃はその日のうちに、インターコー
ス参加の各国スキー教師たちによって、世界
中に伝えられた。

私はそのニュースを日本のスキー教師の頂
点にあつた平沢文雄に書き送つた。浦佐スキ
ー学校の斜面にサン・クリストフに作られた
のと同じ、ヴェレンテクニクのための段々
畑が作られ、浦佐の名スキーヤーたちによる
その技法の解明が開始されていた。

地元オーストリアでさえ、サン・クリスト
フ以外では試みられていない新技法は、世界
でもっとも早く日本の雪の上で試されたので
ある。浦佐から岩岳へ、そして八方尾根のス
キー学校へとヴェレンの波は伝播し、波は日
本中のトップスキーヤーたちに広がつた。

私が帰国して、4月のデモ選を訪れた時
急ヴェの斜面は、ヴェレンテクニクによつ
て征服されようとしていた。

「ヴェレンとアバルマンはどう違うのか」
日本のトップスキーヤーたちの多くは私に
そう尋ねた。

「こんなに早く、世界のトップ技法が消化さ
れる国はない」
というのが私の驚きだつた。

日本のスキー技法の 驚異的な進歩

浦佐の関健太郎、平川仁彦を頂点とする精
鋭たち、北海道の驚異の新鋭藤本進、岩岳の
エース横沢富敏といったスキーヤーのすべり
が大きく変貌していた。

次の年ガルミッシュ・パルテンキルヘンで

開かれるインタースキーに向けて、藤本、平
川の新しい日本のトップデモたちの特訓の中
で、ヴェレン、アバルマンの要素を掘り下げ
る研究が進み、後に曲進系と名付けられる沈
み込み技法が開発された。

ウエーデルンは、ふたつのタイプを持つこ
とになった。ひとつは旧オーストリアの流れ
を踏襲する高いフォームの今というジャンピ
ング系のウエーデルン、そしてもうひとつは
新しい沈み込み系の、今というベンディング
系のウエーデルンであつた。

71年1月、ドイツの景勝地ガルミッシュ・
パルテンキルヘンで開かれた、第9回インタ
ースキーは、前衛技法の競演となつた。

オーストリアのヴェレン、フランスのアバ
ルマン、ドイツのシュロイダー、スイスのO
Kと、主だった国から吸収形の技法が披露さ
れた。日本も、独自に開発した技法、CD項
のターンと呼んだ、曲進系技法を発表した。
丸山周司をリーダーとする日本のデモチーム
の技法は、極めて高い評価を受けた。

その評価が、どれほどのものであつたのか
は、新しい技法を、競演するための特別なス
テージ、ターフェルピステの試技において、
ミッキーを中心としたオーストリアの名手た
ちに混じつてすべるデモとして4人の日本人
が選ばれたということ証明されるはずであ
る。フランス、スイス、ドイツ各国からは、そ
れぞれ2名しか指名されていない。

平川、藤本らは、このターフェルピステで
世界のスキー界のリーダーたちにその存在を
知られることになった。

ガルミッシュでの大会は、日本のスキーが
スキー技法の先進国の中に位置づけられたイ
ンタースキーであつた。

日本人のスキー技法はガルミッシュ以降の
10年間に驚異的な進歩を遂げた。

その進歩を促したものは、デモと呼ばれた
スキーヤーたちの研究心であり、その研究を
促したSADJの姿勢にあつた。

藤本、平川のすべりは、彼ら自身がかつ
み取つたすべりのフィーリングを素直に自ら
の技法として完成させるといった行為によつ

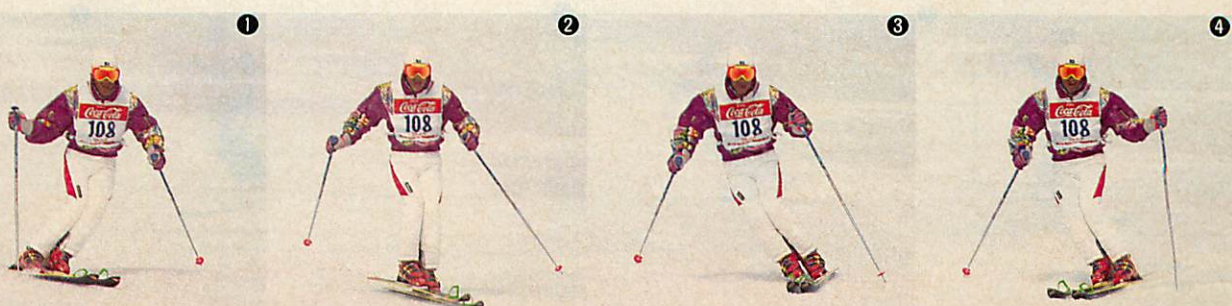


**ロック・ベトロピ
ッチ** (92技術選)
トエッチやファーニ
ーらと比較して、ベト
ロピッチのワールドカ
ップにおける戦績は素
晴らしい。やや荒っぽ
く見えるスキーだが、
その速さへのこだわり
は、より戦術的なム
ードを生み出している。
スタンスを広め、左右
への安定圏を高めた実
用性の高い技法である



佐藤正人 (92技術選)
師藤本から、ザ・デモンスト
レーターの称号を受け継いだ名デモ、
正人のスキーは、まさにデモのた
めのスキーであり、教程の示す技
術を忠実に具現している。
シルエットを正面に固定して左
右均等にスキーを振り出す、その
姿は、様式美の極みにあるスキー
といえるだろう。完璧な日本人の
スキーだ

里吉敏章 (93技術選)
マイクの質の高いスキーにもつ
とも接近を果たした技法は、この
里吉のものであつた。雪面をしな
やかにとらえ、柔らかいヒザで、
雪面からの抵抗を前進力に変え、
スキーの制性を完璧に引き出して、
見事な曲線軌道をつないでいる。
軽快なリズム、それは見ている者
に快感度の高い音楽を感じさせて
くれた



て高められていた。

その個性あるすべりを分析する中に、技法に共通する、体の使い方、運動の法則を見いだすという形で、新しい日本の技法といえる技術論を生み出したのである。

それ以前、オーストリアの技法にどれだけ接近するかだけで過してきた日本が、この時代に入って、自分たちの技法というものを生み出していた。

「こうすればもっとやさしくターンができるのではないか」という仮説が立てられ、「それなら実際にやってみよう」という実験が積み上げられ「スキーとは、ターンとは、こうしたものだったのだ」とする真理、理論が構成される。それはまさに科学的な手法だったのである。

若いデモたちは、ひとつひとつのすべりに自らの仮説を信じ、雪の上で実験を繰り返して人々を納得させる理論を作り上げていた。

当時、教育本部長であった西山実幾理事を中心として、若い実験者たちのすべりは、「屈膝、平踏み先落し」とその要点をまとめ、曲進系技法と呼ぶ理論に定着した。

ウエーデルンはこの10年の間に、大きな変貌を遂げた。フォールラインに扇子を広げるようにテールを押し出すウエーデルンは消えて、左右への深まわりの曲線軌道をつなぐというすべりに変わっていた。

それは、コントロールの技法、止めるテクニックから、より積極的な走る技法、切れるテクニクとなったのである。藤本、平川、関、さらに急ウエの名手三枝兼径の技法は、新しいウエーデルンの理想像であった。

71年以降のデモ選の人気種目、急ウエは前衛技法の競演となった。

日本のトップスキーヤーたちの技法は、インターナショナルの各国のトップデモと比較して遜色ないレベルに到達していた。

ヴェレン的なすべりをする平川、アバルマンに通じる三枝、関、そして、曲進系の藤本と、それぞれの個性がそれぞれの技法を生んでいた。

日本に生まれた ウエーデルン信仰

スキー技術研究において先進国の地位にいた日本は、その後約10年間、中だるみと呼べる停滞の時期を持った。

それは、曲進系技法があまりにも前衛的であり、難解であったために生じた混乱によるものであった。曲進系を軸とした71年教程はわずか2年間で廃止された。普遍的な教程を作るとするS.A.Jの方針によるものであった。73年教程は古いオーストリア教程の技術配列に沿った教程が作られた。曲進系技法は、上級技法の一部として扱われ、ピボットターンと呼ばれることになった。

68年アスペンで廃止が発表された古い段階式の指導理論への回帰は、日本のスキー技法の進歩に大きなブレーキをかけることになった。オーストリアは、古い教程を廃止し段階式指導法から、トータルスキーイングと呼ぶ指導理論に転じていたその時代である。

71年、さらに74年とオーストリアの教程は変更されたが、日本は古いバインシュピール時代のオーストリアスキー信仰から抜け出せずにいたのである。

曲進系技法のウエーデルンは、再びバインシュピールのウエーデルンの優位によって、その影を薄めていった。

緩斜面のウエーデルンは、フォームを正面に固定した伝統的なウエーデルン、そしてコブの斜面では、吸収形のウエーデルンとする状況が生まれていた。

平坦な踏み固められた緩斜面に、左右にテールを振り出しながらすすめるウエーデルンが日本のスキー場の主役となった。日本人のコチャマゲスキーの習性は、こうして生み出された。

すでにヨーロッパでは、緩斜面を左右に振るウエーデルンという技法は消滅していた。ウエーデルンという言葉すらまったく使われなくなっていたのである。

マイク・ファーニー (93技術選)

第30回技術選の最大の収穫は、1位となったアメリカ人、マイクの手ぶりであった。アメリカのスキー教師の中で、スキーのうまさ、トップにランクされていたマイクが、出場3年目のスキーでは、速さ強さのうえに、美しさという要素を加えて、日本人が目指したスキーの理想を、ひと足さきに身につけてしまったといえるだろう。渡辺一樹、佐藤謙らの日本のトップデモたちとの合宿において、一樹の戦略、戦術を学び一樹の技術の要点をつかみとって、尾根岩鞍に臨んだ、その技術選への姿勢が、彼の成功を生んだと見ていい。

速く、強く、正確なスキーは見えて美しいものだ。とホビヒラー教授は語ったが、このマイクのウエーデルンは、スキーに求められるすべての要素をみだし、それはエレガントなムードを醸し出している。マイクのウエーデルンはひとつひとつのターンが切れて走り、美しい曲線軌道を描き出し、その上に、誰よりも、安定感のある静かなムードを生み出している。このレベルまで到達すれば、そのすべるさまは、エレガントな、日本人の求めた幽玄の世界のものとなさえているのである。



ウエーデルンB

走るスキー、切れるスキーを求めて、70年代に始まった前衛技法の成果がこのペンディング系のウエーデルンだが、マイクのこのすべりには、斜面から受ける抵抗を前進力に変え、ヒザのしなやかな動きによって、曲線軌道をつなぐ、近代技法のポイントがすべて満たされていると見えた。

ウエーデルンA

体全体の上下動を使っての連続小まわりターン、という要求に合わせてマイクは、古典的なウエーデルンを見せている。上体をフォールラインに正対させて、下肢を左右に振り出す、というオーストリアが開発したウエーデルンを現代に投影して見せた技法である。